

地域活性化プロジェクト始動

# 大学と住民一体で 石川の特徴浮き彫りに

金沢大学では、地域貢献事業の中核となる「地域活性化プロジェクト」を立ち上げ、「地域経済塾」「まちづくり・観光学」「金沢学」「市民大学院」の4つの事業に取り組み始めた。それぞれの事業がどのように地域に役立っていくのか。各事業のプロジェクトリーダーに聞いた。

学生編集委員 神谷卓史



金箔工芸を体験する留学生を中心とした参加者たち。  
「地域活性化プロジェクト」は文部科学省の特別教育研究経費に採択されている

## 北陸特有のビジネス探る 「地域経済塾」

経済学部地域経済情報センターでは、平成15年度から「地域経済塾」を開講している。

これまで大学の研究成果は大学や学会のなかで完結しがちで、地域に生かされることが少なかった。一方で、「大学は地域の現状を本当に理解しているのか」という問題意識も学内にはあり、学問を地域に還元し、同時に地域から研究課題を吸い上げたいとの思いが徐々に芽生え始めた。経済学部の碓山洋教授は、「石川、特に金沢には、潜在的な可能性があるが、それが地域経済活性化に十分に発揮されていない。グローバル化の進む弱肉強食の世界の中で、その波を乗り越え、独自の経済発展、つまり競争しながら共存し、地域全

体で発展していく持続可能な経済発展の形成に貢献したい」との思いがあった」と、この講座を開いた背景を語る。

地元の参加者の中には、金沢の経済の特質が歴史とどのように関わっているのか知らなかったという人が多く、講義を聞いて驚くこともあったという。参加者は社会人がほとんどで、地元と他県出身者が半々。講義の形式も従来のような教員の話を受身で一方的に聞いているだけではなく、ワークショップやディベートなどを取り入れ、教員と参加者の双方が積極的に関わるようにしている。

参加者は、講座が終わった後も、自主的な交流を続けている。地域経済について話し合いの場を設けることは、街に対して認識を深めることであり、この話し合い自体も広い意味では地域活性化に結びつくとも言える。

「魚屋さんだったら魚を売る。靴屋さんだったら靴を売る。それぞれに役割があるように、大学だったら今日まで培ってきた学問の調査、研究成果を地域の人々に還



地域経済塾。今年は奥能登教室も開講した

元すればいいのです。地域の方々は税金という対価を払っているわけですから」と話す碓山教授。大学の地域活動で大切なのは、一回だけの活動で終わるのではなく、長期的視点で継続させることだ。短期間では、なかなか地域からの評価は得られない。継続的に活動が続けるからこそ周りが注目してくれるのである。北陸でのビジネスは保守的な面が強く、いかに文化と結びつけるかがキーポイントとなっている。地域経済塾はそんな北陸特有のビジネスの特徴を考慮したセミナーであり、北陸のビジネスについて詳しく知りたい人に役立つという。

## 文化資源を掘り起こす 「まちづくり・観光学」

まちづくりに関してはどうだろうか。「まちづくり・観光学」事業は、石川県内の自治体や民間非営利団体（NPO）の協力のもと、学生の長期のインターンシップや



NPO職員と打合せをする学生。  
インターンシップで地域活動に参画した



地域調査実習を通して地域と連携する形を探っている。大学の教員が教えるよりも地域の住民と一緒に考えて、学生自らが何ができるかが考え、主体的に行動するところが特徴的だ。活動は地域住民へのアンケートや聞き取り調査、地域活動への参画など様々である。

まちづくりに学生を派遣する理由に、文学部の鏡味治也教授は「加賀、能登地方では、若者の数が少なく、若い人がもつと積極的に来て欲しいという声を聞く。若者の目で地域の埋もれている文化資源を見直し、掘り起こしてほしいから」と話す。「地域の人々と一緒に考えさせてください」という姿勢が大切であり、「こうすれば必ず街や地域が活性化する」という正解はない。地域がこれまで大事だと思ってきたことが活性化の

## 留学生が観光大使に「金沢学」

鍵だということを、地域の人に再認識してもらうことが「まちづくり・観光学」の目的でもある。

今年で4年目を迎える「金沢学」は、日本文化を学びたい留学生や日本人学生、地域住民を対象に、金箔、加賀友禅など「体験」と「講義」の両面に重点を置いた文化体験学習講座である。留学生センターの八重澤美知子教授は「東京での茶道体験と、金沢のそれとは全く意味が違います。金沢には昔の伝統文化や風土がそのまま残っており、茶室全体が博物館となっていると言っても過言ではないでしょう。そういった空気の中で茶道の体験学習をすることは、伝統文化をそのまま生かした『日本』を学ぶのに、必要不可欠なこと」と言う。また、金沢学では宿泊を挟むため、学生、教員、地域住民同士の、キャンパスでは話せない率直な意見交換も自然と生まれる。

金沢学がもたらす効果について、八重澤教授はこう話す。「金沢学には文化を発信する役割があります。金沢学を学んだ留学生や日本人学生が自分の国や地域に帰って、金沢の文化を伝えます。こうして一人ひとりの学生が国内はもちろん、

世界に日本の文化を伝える『掛け橋』となっていくことが、大学の地域貢献へとつながるのではないのでしょうか」。

世界都市宣言をしている金沢市。金沢学で理解を深め、日本国内はもちろん帰国した留学生の体験談を通して文化を広めるとともに、地域住民には、金沢の魅力を再発見し関与する機会を提供している。

## 身近な研究テーマを指導「市民大学院」

普段から研究テーマを持った地域住民に対して、大学の教員が一年間にわたって論文も含めた指導を行う「市民大学院」。参加者は、時間的にも余裕がある中高年層の人が多い。身近にある疑問を拾い出し、各個人それぞれが自主的に調べ、毎回の講座で教員の指摘を受けながら論文にまとめあげる。「北陸の宗教と民族」「金沢ゆかりの文学者たち」「現代の韓国と北朝鮮」の3講座があり、定員は各10人ほど。少数数なのも熱意と意欲を持った受講者に細かい個人指導を行うためだ。文部科学省の「地域活性化プロジェクト」に採択されたこともあって、料金は30回の講座で9千円と安い。これからの市民大学院のあり方について、文学部の島岩教授は「地域活性化プロジェクトは5年計画とされていますが、地域文化の継承を考えると、5年経ってもこのプロジェクトが続くようなシステムを作りたいです」。

人ひとりの学生が国内はもちろん、世界に日本の文化を伝える『掛け橋』となっていくことが、大学の地域貢献へとつながるのではないのでしょうか」。

いすね。また、同じ

人が何年も関わっていると、講座内容がマンネリ化してしまう恐れがあるのだ、と

人を入れ替えられると講座も活発になるでしょう。地域と大学がそれぞれ相手をよく知らないことが「心の距離」を作り、互いに近寄り難い雰囲気を作っている原因ではないかと考える島教授。両者の情報交換がスムーズにいけば、自然と距離は縮まってゆくだろう。そうすれば大学と地域によるコラボレーションが生まれ、新しい未知の領域に突き進む大きなきっかけを生み出すはずである。

## 疑問や悩みを共有し一緒に解決方法を探る

大学の地域貢献を考えると、一般的な講義形式の講座や学生による奉仕活動など、一方通行的で、しかも全国どこでも通用するような内容をイメージする人はいまだに多い。しかし、全国の各大学ではさらに一歩踏み込んだ形の貢献が目立ち始めてきた。

取材した4事業をみてわかるように、金沢大学では以前から地元ならではの文化的土壌や歴史などに着目し、そこで暮らす人々の



市民大学院の一場面。参加者がそれぞれの研究テーマについて発表している

素朴な疑問や悩みに答え、解決の糸口を一緒に模索してきた。また、地元住民だからこそ気づきにくい見落としやすい郷土の「魅力」や「誇り」をわかりやすく伝え、地元の高さを再認識してもらう努力も続けている。全ての事業が結果として「まちづくり」につながっているのである。

これらの活動は、金沢大学が地域に根ざした大学であることを改めて示すとともに、「今後より深く地域と密着していきたい」という意思の表れでもあるのだ。どちらが主でも従でもない。大学と地域住民が一緒に歩むという姿勢を持ち続けることが、これからの高い地域貢献を育んでいく。